慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フエルヂナンド・ラッサルと独逸労働者（二）少時より「労働者綱領」まで
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1917
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.11, No.7 (1917. 7) ,p.896(54)- 916(74)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19170701-0054

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フエルヂナンド・ラツサルと獨逸勞働者（二）

少時より「勞働者綱領」まで

小泉信三

二

既に述べたる如く本篇の主題は勞働者首領（レエバアリイダア）としてのラツサルである。從て彼れが身を勞働者運動に投ずる以前の事歴に就ては必要なる最小限度にまで記述を短縮する。Ferdinand Lassalle は猶太人の絹商 Hermann Lassal の子として一八二五年四月十一日獨逸シユレジエンの都府ブレスラウに生れた。同じく猶太人の出なるカアルマルクスの誕生に遲るゝこと七年である。ラツサルが運命の一部は既に其生れた日に定められて居た。彼れが猶太人の子として生れたと云ふ事が是である。一八四八年に至るまで東部獨逸の諸地方に於ける猶太人は未だ自由を與へられざる別種の民として迫害を受けて居た。ラツサル自らは富裕の商家に生れたが爲め其同胞の多くが蒙る凌辱薄遇からは免れることが出來たけれども、少年フエルヂナンドの鋭敏なる感觸を刺戟するが如き不愉快なる經驗は決して珍らしくはなかつた。ラツサルの生涯を通じて變らざる壓制者に對する狂熱的反抗心は既に彼れの少年時に於て養はれたものと見ることが出來るのである。マルクスとラツサルとが殆ど時を同ふして共に猶太人の家に生れた事は固より偶然の奇縁と云ふ可きであらう。併乍ら十九世紀に於ける勞働者階級の解放運動が久しく抑壓迫害の下に苦んで來た猶太人種の間に二人の戰士を見出した事は決して無意味ではないのである。ラツサルは晩年に至て猶太人を憎み「世に吾輩の特に嫌忌して止まざるもの二あり。文人と猶太人と是也。然り而して吾れ自らは其雙方に屬す」と公言し、又其姓字 Lassal の猶太名らしきを厭ひ之に fon の語尾を附加して Lassalle と改めたと傳へられて居る。併し乍ら少年のラツサルは實に「イスラエルの公子」であつた。彼れは其同胞の薄倖を悲しみ事に觸れては壓制者

の横暴非道を憤る一個純良の猶太人だつたのである。Paul Lindau に依て公にされた彼れの日記は善く一八四〇年から四一年に亘つて十五才と十六才のラツサルが面目を傳へると同時に吾々は後年勞働者首領たるラツサルの片影をも亦此に窺ふことが出來るのである。

一八四〇年二月一日の日附にて十五才のラツサルは記して曰く

「……吾れは宗門の儀式を守らずと雖も現に世にある猶太人中其最良の一人たることを自信す。Bulwer が作 Leila 中の猶太人の如く吾は同胞を現在の抑壓より救はんが爲めには敢て吾命を賭す可し。再び猶太人を名譽ある民族たらしめんが爲めには斬首臺も厭ふ所に非ず。吾は小兒らしき夢想に耽るとき猶太人の自由を回復せしむ可く劍を手にして彼等が先頭に立つ我自らを心に描きて喜ぶなり」と。更に別の日彼れはダマスクスに於ける猶太人迫害の報に接して悲しみ、猶太人が唯々として其迫害に甘じ、起ちて敢て反抗せざるの無氣力を憤慨し、「嘗て瑞西人を驅りて反逆せしめたる壓制は之よりも猶ほ甚しかりしか。……無腸漢の國民よ、汝はより善き運命に値せず。踏まれたる虫は猶ほ頭を擡ぐ、而かも汝は更に更に低く首を垂るゝのみ」と叫び、又別の日「……起ちて基督敎徒の血を流す可き時は既に熟せるものゝ如し。神は自ら助くるものを助く。骸子は既に盤上にあり。たゞ來りて之を投ずるものを待つのみ。」と記して居る。

少年のラツサルは善良の學生ではなかつた。彼れは鄕里の中學（ギムナジウム）校に於て屢敎師と爭ひ、事を僞りて課業を欠席し、又通信簿に父の署名を僞造して敎師を欺いた。是等の非行の爲めプレスラウの中學は彼れに取りて不愉快なものになつた。彼れは自ら商人たらんと決心し父に請うてライプチッヒの商業學校に移つた。一八四一年五月の事である。ライプチヒ時代は種々の點に於てラツサルの生涯に取て意味ある時代であつた。フェルヂナンドは此時代に於て政治に興味を感じはじめた。ビヨルネ及びハイネの名は屢彼れの日記に記されるやうになつた。而して專ら其感化に依てフエルヂナンドは革命主義民主々義共和主義に傾いた。彼れはビヨルネを讀んで之を崇拜し、其「巴里通信」に依て獨逸三千萬の人民は三十の暴君の爲めに壓抑せらるゝの事實を知り愕然として驚いた。又彼はハイネを愛讀して次の如く記して居る。「吾は此のハイネなるものを愛す。彼は實に第二

の我なり。何ぞ其筆力の雄勁なる。……而して此のハイネが其ジヤコバンの帽を捨てゝ代ふるに金刺繍の帽を以てしたりと云ふか。然れども、然れども余は信ず、彼れが「余は王黨にして民主々義者に非ず」と稱するは必ず一の諧謔に過ぎざることを。そは一の皮肉（イロニイ）に過ぎざる可く思はる。恐らくそれに相違なかる可し」と。

斯くの如く少年のラツサルは早く著しき革命主義の傾向を示して居る。併し乍ら、彼れが思想學說の斯く、民主々義に傾けるにも拘らず、彼れが天賦の性情に深く根ざせる正反對の傾向は彼れ自らも之を否定することが出來なかつたのである。多くの人が矛盾多きラツサルの生涯を論ずるに當つて必ず引用する所の日記の一節を再び茲に引かしめよ。七月十九日（一八四一年）ラツサルはライプチヒ市立劇場にシルラアが作 Die Verschwörung des Filsco zu Genua を觀て感ずる所あり、歸來燈下に記して曰く。「今日劇場に行けり。ロエヂ「フイエスコ」を演ず。嗚呼實にラヴニヤ伯（フイエスコ）は偉大なる人格なり。余は今日革命的、民主的共和的感情を抱くことに於て人後に落ちずと雖も、若し身を置くにラヴニヤ伯の境遇に於てせば必ずや伯と等しく進退したる可しと感ずるものなり。余はジエノアの第一市民たるを以て甘んぜず必ずや手を王冠に向て差し展べたる可きを信ずるものなり。由て顧ふ吾は一個の唯我主義（エゴイスト）者なる乎。余をして公侯貴族の家に生れしめば、必ず徹底的なる貴族主義者たりしならん。然れども余は一町人の子に過ぎず、故に余は一個の民主々義（デモクラット）者たる可し。」と

一八四一年八月、己れの到底商人たるに適せざることを知りてラツサルは遂に商業學校を去つた。ラツサルは大學に進んで學問を研究する希望を父に申出で、父の問に對して專攻の學としては、「最も包括的なる世界の研究、人類の神聖なる利害と最も密接の關係ある研究、即ち史學の研究」を撰擇す可き旨を答へた。父は寧ろ其子の法學か醫學かを學ばんことを希望したけれども、フエルヂナンドは聽かずして曰ふ「醫士も辯護士も共に其知識を賣買する商人に過ぎぬ。自分は文筆の業に身を捧げ度い。今は人類（ヒユマニテイ）の神聖なる目的の爲めに戰ふ可き時である」と。其言葉は誠に道理である。併し何故吾が唯一の希望たるフエルヂナンドが特に殉教者として擇ばれねばならぬかと父が嘆息したのに對し、子は其日記の中でか

う答へて居る。「父の言尤もなり。數多の人の中吾が特に殉教者たる可き理由ありや。然れども凡べて人の悉く斯く云ひて任を他に讓らば何時の日に於てか戰士は現はる可き。何故に我れ特に起ちて殉教者たらざる可らざるか。他なし、神吾胸裡に吾を呼び起たしむるの聲を授け、神戰ふ可き力を吾に與へたればなり。吾れ崇高なる目的の爲めに且つ戰ひ且つ忍ぶの力を有すればなり。神が特に授け給へる力を他に用ひて以て其意に背く事を欲せざればなり。一言にして云へば他に如何ともすること能はざればなり。……」と。Paul Lindau に依て公にされた少年の日記は之を以て終つて居る。

既にしてラッサルはブレスラウの大學に入つた。專攻は史學、哲學、言語學及び考古學であつた。一八四四年四月には伯林大學に轉じて更に研究を續けた。彼は大學時代に於て當年の學生の多くと共に大にヘエゲルの影響を受け、所謂ヘエゲル左黨の一人となつて政治上哲學上に於ける急進主義（ラヂカリスムス）の信念を堅めた。同時にラッサルは學者として聲名を走せんとの志を堅め異常の興奮と熱心とを以て其專攻の學を勉強した。卒業論文の主題として彼は「難解」の稱ある希臘の哲人ヘラクライトス Herakleitos der Dunkle を擇んだ。何故に彼は故らに難解の稱あるヘラクライトスを其研究題目に擇んだか。ヘエゲルの流れを汲む一青年としてヘエゲルが曾て己れの先驅者を以て許したる此哲人に特に心を惹かれたと云ふ意味もあるであらう。併乍らベルンスタイン、ブランデスの如き信用す可き傳記者の推測する所に從へば、ヘラクライトスは實に「難解」の稱あるが故にラッサルの擇ぶ所となつたのである。難事を見て故らに之に向て突進する性癖と事毎に儕輩を凌駕して快哉を叫ばんとする名譽心とは特に難解を以て知らるゝヘラクライトスに依て自家の力量を試みる可くラッサルを誘つたのである。（前掲ラッサル全集第一卷二一頁 Georg, Brandes, F. Lassalle 英譯三二―三頁）

大學の業を卒へたる後一八四四年ラッサルは一には歐羅巴精神生活の中心地を觀る爲め又一には論文材料蒐集の目的を以て世界の都市たる巴里に遊んだ。當年の巴里は歐洲文明の中心地たると同時に社會主義の中心地であつた。一八四八年二月革命は一時佛蘭西全國を化して社會主義實驗室たらしめたと云はれて居る。ラッサルが遊んだ當時此大都市はルイブラン、プルドオン、コンシデラン、

ブランキの徒に依て將に來る可き革命の爲めに準備を整へつゝあつたのである。カアルマルクスは其社會主義の最初の根底を巴里に於て定めた。ラッサルも亦巴里滯在中社會主義に就て學ぶ所ありたる可きは想像に難からぬ所である。彼は又巴里に於て其少年時の崇拜人物たりしハインリヒ・ハイネと交つた。ラッサルは既に少年の頃より常に其接觸したる人々に或は善き或は惡しき、併乍ら兎に角何等かの印象を殘さずして止むことなき人物であつたが、今ハイネと交通するに及んで彼れは又ハイネの心に深き印象を留めた。ハイネは詩人 Herwegh にラッサルを紹介するに當つて Je vous présente un nouveau Mirabeau と云ひ、又其の Varnhagen von Ense に宛てた紹介狀に於て Herr Lassalle は最も優れたる天賦を有し、最も深き學問と、最も廣き知識と、最も偉大なる洞察力と最も富瞻なる想像力とに加ふるに意志の力と處務の巧妙とを以てし、實に余をして驚嘆せしめたり……」と云つて居る。巴里に居ること二年にしてラッサルは獨乙に歸つた。意想外の事が起らなければ彼れは先づヘラクライトスに關する著述を完成して學者生活の第一階梯を踏む可き筈であつたのである。然るに此時一生涯の轉機となる可き事件は彼を待受けて居た。一八四六年ラッサルは伯林に於て伯爵夫人 Sophie Hatzfeld と相知るに至つたのである。

三

ラッサルとハッツフェルド伯爵夫人との關係に就ては詳しく述べることを好まぬ。たゞラッサルの生涯の大事件として之れ丈けの事は記して置かなければならぬ。伯爵夫人ハッツフェルドは放蕩無賴なる夫伯爵の不當なる虐待に堪へ兼ねて離婚の訴訟を提起しつゝあつた。ラッサルは宛も此時伯爵夫人を知り、一片義俠の心抑へ難く、此困難なる仕事を一身に引受けて起つたのである。ラッサルより長ずること二十年にして猶ほ容色あり、才學ある此高貴の婦人と二十一の革命主義者との關係が後日に至つて單純なる友誼以上に進行したことは周知の事實である。併し少くとも彼が此事件の渦中に投ずるに至つた動機は戀愛ではなくて其自ら明言するが如く虐げられたる弱者の爲めに發する義憤であつたと解釋するのが當然であらう。幸に、ラッサルの努力は徒勞に終らずして傲慢なる伯爵は終に屈服し、夫人は目的を達することを得たと同時にラッサルは夫人から

爾來終生四千タアレルの年金を受け衣食の計に煩はさるゝことなく好む所の事業に沒頭することが出來たのは彼の爲めに幸福であつた。併乍らラッサルは此事件の爲めに實に高價なる犧牲を拂つたのである。彼は完成に垂んたる「ヘラクライトス」を放擲して正に八年を之が爲めに費やし、法廷に立つこと三十幾度に及んだと云ふ。彼は此事件を處理する上に於て其政治家的才能の非凡なることを示したと同時に惡辣なる伯爵側の奸謀手段に對抗する必要上不知不識同じ手段を以て之に酬ひることを餘義なくされた。ラッサルが目的の爲めには深く手段を擇ばざる人となつたのはハッツフェルド事件の爲めに彼が拂つた犧牲中の最大犧牲であつた。之れベルンシュタインが彼れの爲めに惜んで止まざる所である。此性癖が後年如何に彼に災するかは後段彼とビスマルクとの關係を叙する場合に明になるであらう。

ラッサルがデユッセルドルフにあつて、ハッツフェルド事件に沒頭しつゝあつた間に一八四八年の革命が來た。ラッサルは勿論革命運動と無關係ではなかつたけれども、此運動に於て彼は決して主要なる登場人物ではなかつたのである。

吾々はたゞ彼がマルクスの新萊因新聞に寄稿して革命運動に聲援したる事實と、官憲に對する抵抗煽動の廉を以て六ヶ月の禁錮に處せられた事實とを記憶するに止まる。要するに一八四八年の革命は彼に取て生涯の一挿話に過ぎない。其終生の事業たる全獨逸勞働者同盟を創めるまでには猶ほ其間に十四年の歲月が經過するのである。

ハッツフェルド事件が解決を告げたのは一八五四年の事である。八年間放棄して顧みなかつた「ヘラクライトス」に向つて始めて再びラッサルは全心を傾注した。一八五七年彼はデユッセルドルフから再び居を伯林に移し、茲に學者文人としてのラッサルの生活は始まる。之が大凡そ五年間繼續するのである。伯林に居を移した同じ年「ヘラクライトスの哲學」Die Philosophie Herakleitos des Dunklen von Ephesos 1857 は遂に公にされた。越えて二年彼は更に筆を戲曲に試みて史劇 Franz von Sickingen 1859 一篇を作り。同時に伊太利統一戰爭に際しては外交政策を論じたる「伊太利戰爭と普魯西の任務」Der Italienische Krieg und die Aufgabe Preussens 1859. を著はし、再び二年を經て浩瀚なる法學上の著作「既得權の體系」二卷 System der erwor-

benen Rechte. Eine Versöhnung des positiven Rechts und der Rechtsphilosophie 1861. を出した。是等本論文の領域に屬せざる作物の價値に就ては固より一言の批判をも加へることが出來ない。たゞ傳記家の傳ふる所に依て察すれば「ヘラクライトスの哲學」は確かにラツサルが生涯の傑作であつたらしい。即ち當時の專門哲學者の批評は區々にして或者は之を以て一時代を劃する傑作なりと稱揚し、他の者は又此書にはヘエグルに依て說かれた以上には何物も云はれてないと主張するけれども、爾云ふ者と雖も、此書が一の優秀なる作物たることは敢て否定しなかつたのである。（ラツサル全集ベルンスタイン序文二八―二九頁、ブランデス三四頁參照）「フランツフオンジツキンゲン」に至ては其文學作品としその價値は乏しい。たゞ作中人物の口を籍りてラツサルの政治思想が表白せられるのと戲曲主人公の運命が作者自身の夫れと相通ずる點を持て居ることが吾々に興味を感じさせると云ふ。既得權の系統に就ては一挿話がある。ラツサルは本と哲學々生でハツツフエルド事件に關係した時には法律の知識は皆無であつた。不撓不屈なる彼は此事件の有利なる解決を求めんが爲めに先づ法律を學ぶことから始めたのである。「既得權論は此獨修に依て學んだ法律學を基礎として其上に築かれたのだと云ふ。而して此書は其著者の「異常なる創造力（シヤツフエンスクラフト）及び卓越せる法學上の觀察力を證明するものだと云ふ點に就ては專門家の間に略ぼ定評がある」と云はれて居る。（ベルンスタイン序文六九頁）

「ヘラクライトスの哲學」から「既得權の系統」に至る、凡そ五年間の伯林生活はラツサルの生涯に於て最も平靜なる時代である。ハツツフエルド家からの年金に依て彼は後顧の憂なく、其好む所の學問上の勞作に耽ることが出來た。而して其著述は彼が何物よりも貴しとする「名聲」を齎らした。彼は始めポツダアム街十三番に後テイヤガルテンに臨めるベルヴユウ街十三番に居を營み、當世知名の文人學者政治家の爲めに其サロンを開いて一部社交界の寵兒となつた。若しラツサルにして書齋と客間とを以て天地とするならば此時代は彼に取て最も愉快なる得意の時代でなければならぬ。併し、ラツサルは學者としてたしかに或天分を具へ、事物に對する研究欲の旺盛なる點に於て、學者たるの第一の資格を具へて居たにも拘らず、彼は到底書齋の生活に堪へ得る人物ではなかつたのである。抑へ難き

Tatendrang は日々彼を苦しめて止まない。平穩無事の日を送りつゝ彼は正に己れの爲す可き事を放擲して爲す可らざることを爲しつゝあるのだと云ふ自責の念から免れる事が出來なかつた。既に前段に引用した日記の一節に示さるゝ通り少年のラッサルは嘗て猶太人の解放者を以て自ら擬し、又「……何故に吾れ特に起ちて殉教者たらざる可らざるか。他なし、神吾胸裡に吾を呼び起たしむる聲を授け、又神吾れに戰ふ可き力を與へたればなり。吾れ崇高なる目的の爲めに且つ戰ひ且つ苦しむの力を有すればなり、神が特に授け給へる力をば他に用ひて以て其意に背く事を欲せざればなり……」と云つて居る。其れから大凡そ二十年は經過して居るが、内に名狀す可らざる實行力の衝動を感じ、起ちて殉教者たるの使命を自覺することに於て三十幾歳のラッサルは日記を記した十六の少年と少しも異るところはないのである。彼れは此頃（一八六二年の始め）人に與へたる書簡の中犬の如く口腹の欲を滿たせる平靜の生活に對し如何に不滿を感じ、如何に焦慮し煩悶しつゝあつたかを語つて居る。（B. Harms, F. Lassalle. 二五―六頁）止むを得ず手を拱して實世界の傍觀者たるに甘ずることが如何にラッサルに取りて苦痛であつたかはラッサル自らにして始めて了解し得る所である。

併し、かゝる間にラッサルの平靜なる生活は漸々終りに近づきつゝあつたのである。一八六三年の始め、一部勞働者間に全獨乙勞働者大會召集の企てあり、ライプチヒに於ける其中央委員はラッサルに向て勞働者運動並に勞働者の境遇を改善するの手段に就ての意見を求めた。之に對するラッサルの答辯が即ち有名なる「公開答狀」Offenes Antwortschreiben」である。ラッサルが實際運動の傍觀者たることは、此時を以て終るのである。そこで吾々は今暫くラッサルを離れて、彼が運動の背景をなす獨乙勞働者運動と其當時の普魯西政界の概況とを少しく明にする必要がある。

四

一八四八年三月革命鎮定後の獨逸勞働者運動は憲章黨（チャアチスト）運動鎮定後の英國勞働者運動が閲みしたと稍似たる經過を示して居る。英國に於ては一八四八年憲章黨運動終に失敗に終るや、革命主義階級爭鬪的思想は一時全く影をひそめ代つて壇上を占領するものは基督教社會主義者の階級調和的勞働者慰撫的運動であつた。即ち Maurice, Kingsley, Ludlow 等の篤志家は基督教の精神に基づき利他友愛の

說教に依りて階級間の憎惡、各人の利己心を緩和し、之に依て社會的平和の實現を期待せんとしたのである。而して勞働者境遇改善の實際的手段として提唱されたるものは產業組合の普及であつた。一方獨乙に於て四八年の革命失敗に終るや、重なる共產主義者は何れも或は國外に追放せられ、或は獄裡に投ぜらるゝの運命に遭遇し、勞働者階級の運動は反動政府の抑壓の下に久しく再び起ることを得なかつた。而して英國に於けると同じく勞働者運動は中產階級の篤志人士が「勞働者の幸福の爲めに」提唱する各種の方策の蔭の形を潛めたのである。而して吾々は是等篤志人士の最重もなる一人として英吉利のモオリス、キングスレエに比較さる可き一人物を自由主義者にして普魯西の代議士たるSchulze-Delitzschに於て見出す。シユルツエが社會問題解決の方法として「自助」の原則に基づく產業組合の熱心なる主張者であつた事は既に人の知るところである。シユルツエが主張する所の產業組合は決して近世の意味に於ける勞働者問題の解決に資す可き特別の方策ではなくて同時に小工業家小商人の救助を目的とする所の手段であつた。否な通常シユルツエ・デリツチの名を以て記憶せらるゝ信用組合原料組合（シユルツエ式消費組合の發達に就ては殆ど云ふに足るものなかりし）に至ては寧ろ全然賃銀勞働者と關係なしと云ふのが適當である。併乍ら當時の獨乙に於ては大工業の發達日猶淺かりしが爲め、多數の手工業者は新興の大工業に對し猶ほ競爭を繼續し得る地位にあつた。從てシユルツエ式組合は正に時代の要求する所のものであつたのである。斯の如くシユルツエ式組合は一方に於て確かに時代の要求に應ずる所ありしと同時に他方に於て其賃銀勞働者の爲めに貢獻し得る範圍極めて狹小なりしにも拘らず、當年の自由主義者は之に優れる如何なるものをも提唱すること能はざりしが爲め自らにしてシユルツエデリツチの說は當時に於ける最も權威ある社會政策論として耳を傾けられたのである。

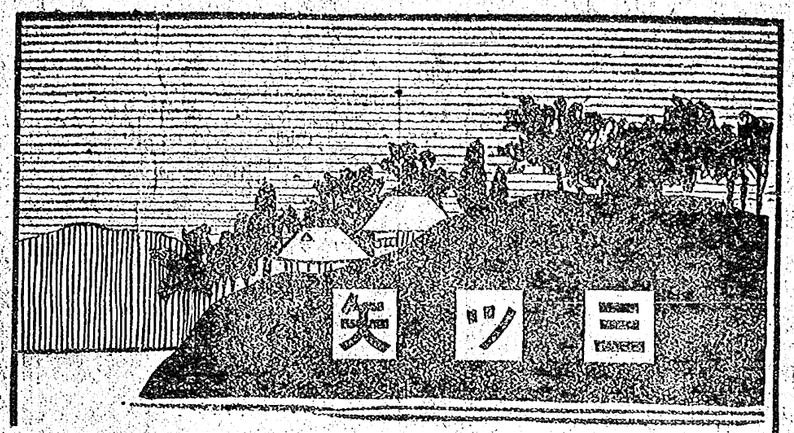
一方に於て當年普魯西の政界は所謂「憲法爭鬪」Verfassungskonflikt時代であつた。即ち普魯西の下院に多數を占めたる進步黨Fortschrittspartei は英吉利流の自由主義憲政主義を標榜して憲法擁護の爲めヰルヘルム一世の官僚政府と大衝突の端を開きつゝあつたのである。當面の問題は陸軍改革の豫算であつた。一八六一年の總選擧に於て始めて進步黨が一大勢力として出現したる後、政府は一度議會を

解散したけれども總選擧の結果は更に一層政府の爲め不利であつた。於此一八六二年兵制改革豫算案が三〇八に對する一一の少數を以て否決せらるゝやキルヘルムは議會に高壓を加ふる爲め當時巴里駐在の公使たりしオツトオ・ビスマルクを擧用して內閣の首座に置いた。ビスマルクは議會に臨んで獨逸問題はたゞ鐵と血とのみ能く之を解決すと揚言し、下院が前の決議を飜さゞるを見るや、彼は公然憲法を蹂躙し、豫算に據らずして兵制改革を實行した。此に至て局面は極めて明瞭に展開し、立憲と專制、人民と官僚、正義と權力とは判然相對立する形となり、全國民の輿論は期せずして進步黨の背後に集つた。

斯の如く一時全國民は憲政擁護のチヤムピオンたる進步黨の後援者となつた。併乍ら勞働者は決して悉く進步黨に滿足して居たのではない。否な、彼等、殊に其急進分子は進步黨に不滿足を感ず可き充分の理由を持て居たのである。元來進步黨は勞働者政策として殆ど云ふに足る程の綱領を持つて居なかつた。黨中の幼稚なるものは原則的に勞働者問題の存在を否定する素朴單純なる自由放任主義者であり、進步せるものはシユルツエデリツチの徒であつた。而して進步黨全體の勞働者に對する態度は未成年者に對する後見人の態度であつた。彼等が猶勞働者の獨立運動に對する欲望に就て如何に無知であつたかは勞働者が「國民同盟」Nationalverein に加入せんとしたる場合に勞働者は同盟の名譽會員なりと知る可しとの口實の下に之を拒絕した一事に依ても明かである。（普魯西を盟主として獨乙國民の統一を實現せんとしたる國民同盟と、普魯西に於ける進步黨とは同一自由主義運動の二方面なりと見て差支なし）そこで勞働者中の急進分子、殊に四八年の共產主義者の殘黨の間には進步黨の手から離れて獨立の勞働者運動を起さんとする計畫が企てられることになつた。此場合に當て是等勞働者は其運動の方針に就て多くの疑問に逢着した。就中彼等が切に知らん事を求めたのは政治上に於て勞働者は如何なる態度を進步黨に對して取る可きか、及び抑もシユルツエデリツチ組合なるものゝ勞働者に取ての價値如何と云ふ事であつた。ライプチヒ勞働者委員は此疑問を提出してラツサルの說を求めたのである。而して之が有名なる公開答狀の草せらるゝ機緣となつたことは既に前段に述べた通りである。

併乍ら茲に疑問は、ライプチヒ勞働者委員は何故に特にラツサルを擇んで其說

を求めたかと云ふ事である。前に述べたる如く、ラッサルは當時既に學界文壇に名を成して居た。併し、彼れを有名にしたものは「ヘラクライトスの哲學」と「既得權の體系」と及び「フランツフォンジッキンゲン」とである。即ち彼れの名は哲學者として若くは文人として聞えて居たのである。從て彼れの名聲は勞働者運動に關係のない方面に於て聞えて居たのである。然らば何故に勞働者は說を聽く可く特に求めてラッサルに來りしか。何が抑もラッサルを勞働者の間に有名ならしめたか。此問に答へるものは即ち彼が一八六二年四月十二日伯林市外オラニエンブルグの手工業組合に於て試みたる講演にして後小冊子として上梓されたる「勞働者綱領」Arbeiterprogramm である。「勞働者綱領」は「公開答狀」と共に自分が認めてラッサルの二大傑作となすに躊躇せざるものである。是に於てラッサルは始めて勞働者階級の立脚地に立つ民主々義者即ち社會民主々義たるの面目を明にし、ブルジョワジイに對するプロレタリヤの意義と其歷史的使命とは茲に始めて誤りなき言葉を以て說かれて居るのである。從て勞働者首領としてのラッサルを傳ふるに當つて此小冊は最重要の意義を有する著作である。吾々は此傑作の內容に就て少しく詳細に學ぶ遑を與へられなければならぬ。（未完）



サイダー
平野水
紀念飲料
コロナ

三ツ矢の三大特色

一 御料品製造の特別なる恩命を拜受せる事
一 天然炭酸瓦斯純良にして豐富なる天然炭酸瓦斯噴出する事
一 胃腸、糖尿、腎臟、氣管、婦人病に特効ある鑛泉にて壜詰する事

以上の三大特色は他の清涼飲料水にはありません

三ツ矢サイダー
三ツ矢平野水　製造元
帝國鑛泉株式會社